



ラブメイカー／*Eros in Orbit* (1973)／ジョセフ・エルダー編（浅倉久志他訳）／早川書房（文庫・9/30刊・¥360）

一時期——といっても、もう六、七年前になるが、オリジナル・アンソロジーがやたら流行った時期がある。テーマ別のものも多かった。もっとも、（エルウッド編のものなど）形だけといった作品集も結構あって、結局アンソロジー・ブームが去り、後々まで残ったのは、ごく一部にすぎなかった。

さて、本書のテーマは“性”。性というのは、本来、大変に生理的なテーマであるはずだ。しかし、現実には、これほど即物的に扱われている存在も少ない。一方では、人間性の解放を象徴する“性”が、その一方、情報産業の道具と化している。そして、本書での捕え方もまた、きわめて物質的である。エクラン「ラブメイカー」、シルヴァーバーグ「グルーブ」——この辺りが中心となる作品だが、何か白々とした冷たさに、その物としての一面が読み取れるだろう。アメリカSFの後進性が、かえって正面切って性を描くのを、躊躇させたのとれないこともない。けれども、これらの特徴は、物質的“性”の国アメリカだからこそ、あらわれてきたものだとも考えられよう。性の描き方はまちまちでも、作家たちの姿勢は、その点で共通するようだ。（俊）